

「女らしさ」のレトリック エリザベス・ギヤスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』

市川 千恵子

I

資料を緻密に分析した実証的なブロンテ伝が出版され始めた 20 世紀後半において、Elizabeth Gaskell の *The Life of Charlotte Brontë* (1857) への関心の多くは、虚構性と自伝性の二つの要素に集中してきた。¹ Carolyn Heilbrun はギヤスケルがシャーロット・ブロンテの天才を称えず、有名な女性作家、すなわち「変人」である、という汚名から救い、女らしさという安全な領域へ連れ戻した (Heilbrun 22) と指摘する。確かにギヤスケルはシャーロットを規範的な女性として描いた。だが、そのことによって、シャーロットが作家であった事実をギヤスケルが隠蔽しようとしたと考えるのは性急ではないだろうか。また、『生涯』を「伝記であるというよりも自伝的である」とみなす Felicia Bonaparte は、ギヤスケルの語りが伝記作家としての語りとシャーロットに自己投影する語り分裂していることを示唆するが、結局は伝記作家としての語り作家 “Currer Bell” を殺してしまうと論じている (Bonaparte 232–53)。しかし、自らも女性作家であるギヤスケルがそのようにシャーロットの作家活動を否定したとは考え難い。

Patrick Brontë より伝記執筆の依頼を受ける前から、ギヤスケルがシャーロットの伝記を執筆したいと考えていたことは注目に値する。ギヤスケルは 1855 年 5 月 31 日付で Smith, Elder の社長 George Smith に宛てて、“... I will publish what I know of her, and make the world ... honour the woman as much as they have admired the writer.” (*Letters* 345) と、伝記の目的を明確に示している。ギヤスケルはまさしくシャーロットに作家として、そして一人の女性として名誉を与えようとしたのである。ヴィクトリア朝は多くの女性作家を輩出したにもかかわらず、「書くこと」は女性らしからぬ行為だと考えられていた。あくまでも女性の居場所は家庭であり、他者のために生きることによって女性の存在理由を見つけさせようとする家庭崇拜イデオロギーのもとでは、女性が自らの知性と才能によって社会に進出

する行為は規範からの逸脱だとみなされた。とりわけ、シャーロットの小説に見出される情熱は女性のペンにふさわしくない特質であり、“coarseness”が存在するという評価が下されたのだ。²それゆえに、一人の女性としての私的な生活を、特に心の内を描き出すことによって、ギaskellは『生涯』においてシャーロットが規範から乖離した存在ではないことを読者に訴えるのである。

しかし、文化的に承認される「女らしさ」の表象は「書くこと」の否定ではなく、「書くこと」と「女らしさ」が対立するものではないと主張するための戦略だと考えられる。女性がペンを取ることの意味とその正当化のために、ギaskellは虚構性と自伝性を必要としたのではないだろうか。本稿では、まずギaskellが自己犠牲的で、「女らしさ」を体現するシャーロット像をいかに構築していくかを検証する。次に、ギaskellが「女らしさ」をシャーロットの書く行為を正当化させるためのレトリックとして使用し、そのことにはシャーロットに自己投影する自分自身の文学上の野心を正当化しようとする意図も隠されていることを考察したい。

II

ブロンテ氏が1855年6月4日付の書簡においてギaskellに娘の伝記の執筆を依頼した背景には、シャーロットの死後に書かれた興味本位なゴシップ記事から娘の名誉を守りたいという事情があった。ブロンテ氏が最も心を痛めたのは、*Sharpe's London Magazine* の1855年6月号に掲載された記事であった。³“A Few Words about ‘Jane Eyre’”と題されたその記事は、シャーロットの生立ちを興味本位に書きたて、シャーロットの作品に突き付けられた“coarseness”という評価は、彼女の激しい生立ちや生活環境のためだとしたのである。特に父親の性格のエキセントリックな面を強調し、また子供たちの教育を怠り、その多くは召使に任せていたという記述 (*Sharpe's* 341) は、我が子の知的教育に人一倍熱心であったブロンテ氏には辛いものであったに違いない。このゴシップ的な記事を機に、ブロンテ氏がギaskellに娘の伝記の執筆を依頼したのは皮肉であった。なぜならば、その記事はギaskellが友人に宛てた2通の手紙の内容と酷似しているからである。

湖水地方の Kay-Shuttleworth 夫妻の別荘でギaskellとシャーロットは1850年8月18日に出会い、3日間を共に過ごした。シャーロットが残し

た印象がいかに強烈であったかは、1850年8月25日に書かれたギヤスケルの3通の手紙から窺い知れる。まず1通はLady Kay-Shuttleworthから聞いたシャーロットの生立ちをCatherine Winkworthに伝える手紙 (*Letters* 123–26)である。シャーロットへの深い同情と、彼女の特異な生立ちに対する好奇心が混在した手紙の中で、ギヤスケルはブロンテ氏を「半ば狂気の」と形容する。寝室の椅子をのこぎりで切ってしまったとか、暖炉の前に敷かれたカーペットを火にくべてしまったという話は、ブロンテ氏のエキセントリックな性格を実に鮮やかに物語っている。さらに、同一の手紙においてシャーロットが印刷された『ジェイン・エア』を父にみせ、本を世に出したことを告げた様子が綴られている部分は、若干の修正を加え、*Sharpe's London Magazine* の記事に引用されているのだ (*Sharpe's* 342)。また、宛先が不明とされている、もう1通の手紙では、出会ったときのシャーロットの様子のみを綴り、前者に比べると抑制した筆致である (*Letters* 127)。この手紙は *Sharpe's London Magazine* の「ある夫人がシャーロット・ブロンテに出会ったときの印象」を描いた箇所に一字の変更もなく、そのまま引用されているのである (*Sharpe's* 342)。このように、ブロンテ氏を傷つけ、娘の名誉を回復したいと願って伝記を依頼したギヤスケルこそが、その誤った記事の情報源であったのだ。さらに、同日に書かれた3通目のCharlotte Froudeへの書簡においてギヤスケルは、「彼女の過ちは彼女が置かれた、きわめてまれな環境から生じた過ちである」とか、「彼女は真実そのもので、非常に気高く、純粋な性質の持ち主である」と記しており (*Letters* 128)、この手紙には『生涯』全体に流れるシャーロットへの「アポロジア」と共通する姿勢を見出すことができる。ギヤスケルの書簡の中に読み取れるように、家父としての権力を振りかざすブロンテ氏への嫌悪とシャーロットへの同情は、『生涯』においても変わることはない。

ギヤスケルは第2巻第12章において、次のようにシャーロットの作品の中に粗野な要素が存在することを認めている。

I do not deny for myself the existence of coarseness here and there in her works, otherwise so entirely noble. I only ask those who read them to consider her life, which has been openly laid bare before them, and to say how it could be otherwise. (426)

ギヤスケルはシャーロットの作品に粗野な要素が存在する原因を彼女の家

庭環境の中に見出すように読者を促す。彼女はそう呼びかけることが可能となるよう、ここに至るまでに周到な注意を払いながら自己犠牲的なシャーロット像を描き出しているのである。また、それが常に家庭や家族を介していることは女性の位置を象徴している。『生涯』の執筆に際して参照した *Quarterly Review* (1856) の “British Family Histories” と題された論考が示唆するとおり、ギaskellは「家族にまつわる逸話をできるだけ集め」 (“British Family” 297)、読者の関心をひきつける。ブロンテ氏が時に気性の激しさから銃を発砲して妻を威圧したり、食と衣服への欲を抑制しようとして肉食を禁じ、妻の絹のドレスを切り裂き、子供たちのブーツを焼却したという取材に基づく第1巻第3章のエピソードは、特異な環境の中で育まれたシャーロットの「悲劇」を物語る格好の「逸話」となってしまったのである。

苦悩と義務に満ちたシャーロットの人生のために犠牲となるのは父親だけではない。ギaskellは Branwell をも犠牲にしてしまうのだ。Eneas Sweetland Dallas が *Blackwood's Magazine* の書評において『生涯』のゴシップ性を指摘し (Dallas 78)、また、James Fitzjames Stephen が *Edinburgh Review* において個人の中傷となる記述に対する作家としてのモラルを問う (Stephen 155) ほどに、亡くなるまで常習的にアヘンの吸引と飲酒を続け (226)、借金を繰り返す (249, 273) ブランウエル の痛ましい姿をギaskellは赤裸々に描出した。ギaskellはブランウエルの精神的弱さの原因をブロンテ家の唯一の男子として常に彼を特権的な位置に置き、さらには彼の自制心の欠如を見過ごし、その才能を特別視した (105) 父親の教育にみている。第1巻第3章に挿入されている、ギaskellがかつて伯母 Hannah Lumb から聞いたという薄い袖の服を着て外出したために婚約を破棄された女性の話 (44) や、第3版では削除された、義兄に性的に虐待され、妊娠してしまった女性の話 (46) は、男子に対して寛容である家族と社会への批判を補強するための挿話にほかならないだろう。

父親の奇行、弟の愚行、さらには父権社会の犠牲者としての女性の悲劇といった具体的な「逸話」をギaskellは恣意的に選択し、それらを巧みに重ねることによって、犠牲者としてのシャーロット像を構築するのである。

III

ギヤスケルは第1巻第14章において、「シャーロット自身の言葉を使用できる限りは、他の人の言葉を代わりに使用しないという確信をもち、その確信に基づいて書いている」(231)と、シャーロット自身に語らせることが基本方針であることを明らかにしている。だが、シャーロットの言葉の引用に関して、ギヤスケルには別の方針があった。彼女は1856年12月26日付のスミス宛の書簡において、次のように述べている。

The next showed a nice feminine sense of confidence & pleasure in protection—chaperonage—whatever you like to call it; which is a piece of womanliness (as opposed to the common ideas of her being a ‘strong-minded emancipated’ woman) which I should like to bring out. (*Letters* 430)

一般読者が抱いているシャーロットのイメージを覆す「女らしさ」こそがギヤスケルにとっては望ましく、シャーロットの書簡の選択と引用の基準となっていることは明白である。

ギヤスケルがシャーロットと交流を始め、彼女から受け取った1850年8月21日付の最初の手紙が、1850年1月号の *Westminster Review* に掲載された Sarah Lewis の *Woman’s Mission* の13版に対する書評への感想であったことは、偶然にもギヤスケルの意に合っていたと言えよう。

Men begin to regard the position of woman in another light than they used to do. . . . Certainly there are evils which our own efforts will best reach; but as certainly there are other evils—deep-rooted in the foundations of the social system—which no efforts of ours can touch; of which we cannot complain; of which it is advisable not too often think. (356)

女性を“moral agents”としてとらえ、家庭で男性を支えることによって社会と国家へ貢献せよと呼びかけるコンダクト・ブックの主張に対し、シャーロットの言葉は抑制されている。シャーロットが言及している社会の根底に存在する悪とは、社会における男女の不平等を指していることは疑いようもないが、不平を言わず、考えないようにしようとする自らの言い聞かせているかのような言葉は、女性が置かれた立場を受け入れ、服従し、

耐えるシャーロットの姿を描くためには格好の素材である。さらに、1851年7月号の *Westminster Review* に掲載された“Emancipation of Women”と題された論文⁴ に対し、シャーロットは次のような感想をギヤスケル宛の1851年9月20日付の書簡のなかで綴っている。

I think the writer forgets there is such a thing as self-sacrificing love and disinterested devotion. When I first read the paper, I thought it was the work of a powerful-minded, clear-headed woman, who had a hard, jealous heart, muscles of iron, and nerves of bend leather; of a woman who longed for power, and had never felt affection. To many women affection is sweet, and power conquered indifferent—though we all like influence won. (390)

女性が希求しているのは「権力」ではないとシャーロットが明言しているこの手紙は、作品とその作家の私生活とは全く一致する点がないことをギヤスケルが主張するうえで実に説得力をもつ。まさにギヤスケルが描こうとするシャーロットの姿がこの手紙のなかに存在するのである。また、シャーロットが言う「影響力」とは何か。それが他者への自己犠牲的な愛や、無私の献身によって得られる「力」を意味するのであれば、ヴィクトリア朝のコンダクト・ブックを始めとした女性をめぐる言説が美化した家庭内の女性の「影響力」にほかならない。ギヤスケルはシャーロット自身の書簡を通して、シャーロットがヴィクトリア朝の女性をめぐる言説が繰り返し説いた利他主義、服従、自己犠牲といった女性の徳目を体現する女性であったことを例証する。その結果、小説では女性の経済的自立と男女間の精神的平等を訴えながら、意識のうえでは女性の規範から解放されないシャーロットの姿が際立つのである。

IV

類まれなる業績を残した偉人とその稀有な生涯を規範とし、一般読者に自己の理想像を追求させようとするのが伝記の一つの側面であろう。偉人の成功とそれを支えた人格を称賛する Samuel Smiles の *Character* (1871) はその典型である。*Character* において女性への言及は極めて少ない。言及される場合には、偉人の母としての役割 (Smiles 42–53) と、妻としての貢献 (Smiles 323–35) において、つまり偉大な男性との関係からにすぎず、

本人の功績から称えられる女性の存在は皆無である。ヴィクトリア朝中期の伝記が次世代に継承しようとする時代の理想像の提供を意図していたならば、男性の領域を侵害した女性はこの範疇から自ずと外される。『ジェイン・エア』を出版後、一躍有名作家となったシャーロットの文学上の成功と野心をできるだけ目立たないようにギaskellが配慮し、自らも明言するようにシャーロットの孤独で単調な生活の描写を意図的に反復させる(367)のは、こうした事情によるのである。しかし、シャーロットが一生涯を通じ、娘として、妻として家庭の中の権威に奉仕する女性であったことを強調するギaskellの意図は、シャーロットの「女らしさ」を単に称賛することではない。むしろ、それが女性の文学上の野心を正当化させる戦略であることをこの章では明らかにしたい。

第2巻第2章において、『ジェイン・エア』を世に出し、成功を収めた後でシャーロットは二つの生活を生きることになるとギaskellは語る(271)。Margaret Homansはギaskellがシャーロットの生活を二分し、作家としての想像力は利己的で、実生活は利他的であるとみなしたと論じている(Homans 173-74)。だが、そうした読みはギaskellの真意を見逃している。確かにギaskellは一人の女性としての義務と作家としての義務の調和は困難であると言うが、同時に、二つの義務は相反するものではなく、調和させることも不可能ではないと述べているのだ(271)。さらに、ギaskellは次のように続ける。

She must not hide her gift in a napkin; it was meant for the use and service of others. In a humble and faithful spirit must she labour to do what is not impossible, or God would not have set her to do it. (272)

「書くこと」に他者への貢献を付与し、神から授けられた才能を隠すべきではないと、シャーロットの書く行為を正当化しているのである。また、この言葉に自分自身の才能と作家活動を正当化するギaskellの意図を読み取ることも可能であろう。

作家であることが「女らしく」あることから乖離しないことを示す象徴的な場面は、カラー・ベル、Ellis Bell、Acton Bellの三人が同一人物であるという噂を否定するために、シャーロットとAnneがロンドンへと出向く場面であろう。二人は一日の家事を済ませ、作家として果たすべき義務のために汽車に乗り込む。スミス・エルダー社の社長ジョージ・スミスの前

でカラー・ベルの正体を明かしたことをシャーロットは 1848 年 9 月 4 日に、友人のメアリ・テイラーに宛てて、“I then put his own letter into his hand directed to ‘Currer Bell.’ . . . I gave my real name—‘Miss Brontë’—” (Brontë II, 112) と伝えている。スミスの前で自らの正体を明らかにする場面は、シャーロットの作家としての成功を物語る劇的な瞬間であるはずだ。しかし、『生涯』においてシャーロットがスミスの前に姿を現わす場面では、シャーロット自らが名乗る行為は描かれていない。センセーションを巻き起こした小説の著者と目の前に現れた小柄で地味な女性とが同一人物であることに躊躇うスミスの視点から語る (283) ことによって、ギaskell はシャーロットを受動的な女性の位置へと戻す。だが、そのねらいは作家カラー・ベルの否定ではなく、作品の中でヒロインに女性の権利を主張させた作家、つまりシャーロットの公の姿に「女らしさ」を与え、規範的な女性として描くことにある。

ギaskell が『生涯』においてカラー・ベルを否定しようとしたならば、シャーロットが George Henry Lewes に宛てた 2 通の書簡を引用することはないはずだ。ルイスの『シャーリー』の書評に対し、シャーロットは 1849 年 11 月 1 日付の書簡にて「カラー・ベルは男性であると考えよう」に訴え、作品評価への公平さを期待する (321)。さらに 1850 年 1 月 19 日付の書簡においては、「女性としてではなく作家として評価されること」(334) を強く望む。こうした発言はシャーロットの強い作家意識の表れである。また、それを支えるのは自分の才能に対する自信に違いない。ギaskell は 1 通目のシャーロットの抗議の書簡を引用した後で、シャーロットがその性によって批評基準が下げられることを嫌った (322) とコメントを加えている。ギaskell 自身も作家であるがゆえに、シャーロットがペンを取る意味と直面した問題を理解し、女性作家が共通して抱える問題としてここに訴えるのである。

少女の頃から書くことはシャーロットの生活の一部であった。ギaskell はシャーロットの残した膨大な量の習作期の作品に言及するとき、“... her fancy and her language alike run riot, sometimes to the very borders of apparent delirium.” (71) と評価を下す。ヴィクトリア朝のコンダクト・ブックの著者 Sarah Stickney Ellis は、若い女性が自分の興味を追求し、思考することに没頭する習慣を危険視する (*Young Ladies' Reader* 13)。超自然的な幻想にふけり、創作するシャーロットの習慣は、エリスのような保守的な教育論に照らしてみれば、利己的な行為にほかならない。しかし、

シャーロットの物語を書く習慣は、彼女の常識と日々の家庭的な義務によってバランスが保たれていたのだとギaskellは語る(73)。物語の展開が鮮明に浮かんだときですら、シャーロットがペンを取るのはすべての家庭的な義務を終えてからであった(245)。執筆への興味とインスピレーションが溢れているときであっても、年老いて視力の衰えた使用人のプライドを傷つけまいと、気づかれぬようにじゃがいもの黒い瑕を切り取った(246)という詳細な事例を示して、「書くこと」と女性としての義務は分かち難く結び付き、シャーロットの生活に深く浸透していたことが強化される。さらには、言葉の選択は慎重であり、その配置も正確だ(247)と、書くことだけに専念できない状況下で紡ぎ出されたシャーロットの文章をギaskellは評価し、シャーロットの作家活動と「女らしさ」の両立が達成されていたことを主張するのである。

V

『生涯』の語りが自伝的な様相を呈するのは、ギaskellが自分自身の妻であり、母であり、女性作家であることの経験と苦悩をシャーロットの生に重ねるときである。*Auto/biographical Discourse* (1994)において Laura Marcus は、19世紀に出版された自伝の語りに見られる傾向として、自己と他者の境界の曖昧性を挙げている(Marcus 15)。自己の構築に他者の存在が必要不可欠であるように、自己を語る、つまり言葉を介して自己を構築する際に、自己を形象化するのには、外的虚像を通してであろう。ギaskellにとってシャーロットの生を客観的に語る事が非常に困難になるのは、むしろ必然的だと言える。ギaskellはシャーロットの手紙を読み、再構築してその生涯を語るとき、他者であるシャーロットを通して女性作家である自己を再認識するという問題に直面せざるをえないからである。

ギaskellが1850年2月に Eliza Fox に宛てた書簡の中での次の発言は意味深長である。

One thing is pretty clear, *Women*, must give up living an artist's life, if home duties are to be paramount. . . . I am sure it is healthy for them to have the refuge of the hidden world of Art to shelter themselves in when too much pressed upon by daily small Lilliputian arrows of peddling cares. . . . (*Letters* 106)

家庭における女性の義務を第一に優先させると言明しているが、同時にギaskellにとって創造の世界に身を置くことは自己を日々の労苦から解放し、心の平静を保つために必要不可欠であることが窺える。さらに『生涯』において、ギaskellが同様にシャーロットの書く行為を日常の義務からの解放とみなしていることを見過ごすことはできない。

父親と伯母が寝室に入る9時に降がBronthe姉妹にとっての自己を解放しうる自由な時間であった。第1巻第8章では、シャーロット、Emily、アンの三人はそれまで手にしていた縫い物を片付け、部屋の中を歩きまわり、将来の計画を話し合い、後にはそれぞれの小説の構想などを打ち明け合ったと語られる(117)。ギaskellはBronthe姉妹に女性としての義務を強いる家庭という空間を比喩的に彼女たちを監禁する場として描いている。妹たちが亡くなった後も、シャーロットは夜に一人で部屋を歩きまわった(117)。⁵ギaskellがこのエピソードをシャーロットがRobert Southeyに手紙を書く決心をするという有名なエピソードの前に挿入していることに注目したい。当時シャーロットは教師としてRoe Headに勤務していたが、1836年12月29日付の書簡においてサウジーに文学上の助言を求めた。“Literature cannot be the business of a woman’s life, and it ought not to be.”(123)とサウジーの返答はシャーロットの期待を裏切るものであったにもかかわらず、女性としての義務を怠らず、私的な楽しみに留めるのであれば、書くことは利己的な行為ではなく、許されるのだと彼女はサウジーの助言を好意的に受けとめる(124-25)。その後、シャーロットは職業として文学を志すことをあきらめ、手近にある義務、つまり教えることと家庭的な義務に献身したと語られる(126-27)。しかし、その満たされない思いからシャーロットの心は「与えて、与えて」(127)と叫んだとギaskellは続けるのだ。何の目的も、志もないまま、女性としての義務に執着しようとする努力は、シャーロットの自己を解放させる機会をも奪い、精神的な飢餓をもたらすことが暗示されるのである。

このようにシャーロットの日常生活において保たれていた二つの義務の均衡が破れると、つまり書く機会が失われると、彼女の生活に歪みが生じたとギaskellは示唆する。特にギaskellがシャーロットに自己を投影しているのは、このような書く機会を喪失したことによる精神的苦痛の経験であることは興味深い。

1855年7月にギaskellは『生涯』の執筆準備としてハワース周辺を訪

問し、シャーロットに関する情報を収集した。娘の Marianne に宛てた 1855 年 7 月 27 日付の手紙の中で、ギaskell は仕事上の報告とともに、ロンドンに出かける夫の身支度について言及し、また娘にはリネンを買ったことを告げている (*Letters* 363–64)。このようにギaskell の作家としての活動は、家庭的な義務や配慮と常に併行していた。ギaskell は友人のアメリカの学者 Charles Eliot Norton に宛てた 1857 年 12 月 7 日付の書簡の中で、“If I had a library like yours, all undisturbed for hours, how I would write!” (*Letters* 489) と記している。書斎をもたず、居間のテーブルで作品を書き続けたことが端的に示しているように、ギaskell は自分の時間を明確に公と私とに二分しないまま、二つの義務を果たしていた。しかし、その調和が失われると、ギaskell の心は不安定な様相を呈するのである。『生涯』を執筆中の 1855 年のクリスマスには多くの訪問客を自宅に迎えた。そのことを伝える Harriet Anderson 宛の 1856 年 3 月 15 日付の手紙では、社交によって書く時間が奪われてしまうことへの苛立ちが読み取れる (*Further Letters* 155)。⁶ また、家族との夏の休暇もギaskell にとっては欠かせない義務であり、1856 年の夏は休養先でも伝記の原稿の執筆に追われた。常に多くの義務を果たさなければならぬうえに、『生涯』の執筆は不眠に陥るほど神経を使う作業であり、ついには体調を崩し、ペンを置くことを余儀なくされてしまった (*Letters* 411)。ギaskell は頭痛や不眠から生じたシャーロットの気力の減退と孤独を治癒する策を「書くこと」に見出している。シャーロットが「小説に専念できるときには、すべてが比較的順調」であり、「小説の登場人物への興味が日常生活の興味の欠如を補った」(401) という語りは、ギaskell 自身の苦悩の投影にほかならない。シャーロットについて語りながら、ギaskell は同時に自分自身の経験と苦悩を語ってしまうのである。

第 2 巻第 13 章において、シャーロットの結婚はいくつもの悲しみを乗り越えた結果、ようやく手に入れた幸福であり、特に、私的な場でのシャーロットを見守ってきた男性と結ばれたことを、シャーロットの「女らしさ」の勝利であるかのようにギaskell は描いている。しかし、そう語った直後に、ギaskell はシャーロットに「自分の時間はもはや自分一人のものではなくなりました。他のある人が私の時間の大部分を求めています」(451) とささやかせる。書く機会を失ったシャーロットの精神的飢餓はついに「餓死」(454) というクライマックスを迎える。自己犠牲的な「女らしさ」を象徴するシャーロットの最期に、「書くこと」が家庭的な義務を

果たすうえで、シャーロットの生に必要な心の糧であったことをギaskellは訴えるのである。

VI

『生涯』はギaskellの作品の中で最も女性の問題を掘り下げていないものであるという批判もあるが (Bick 44–45)、むしろその逆であろう。父親、弟、夫に奉仕する自己犠牲的なシャーロット像の構築によって、ギaskellは家庭を比喩的に監禁の場として告発している。また、ペンによって女性の問題を鋭くえぐりながらも、実生活では女性の規範意識から解放されないシャーロットの姿を浮き彫りにすることで、ギaskellは家父長制社会に異議を唱えているのである。

一人の女性がいかにして作家としての義務と女性としての義務を両立させたか、そして、二つの義務がその女性にとっては生きることの深い意味といかに結び付いていたかを描き出すことこそがギaskellの意図である。ギaskellが必要以上にシャーロットの「女らしさ」を強調する理由はそこにある。果たすべき多くの義務を抱えながら、なおも書くことを欲していたギaskell⁷ は、文化的に承認された「女らしさ」を取り込み、シャーロットの生において家庭的な義務と作家活動がとやかに結合し、相互に補完していたかを示して、シャーロットの書く行為に正当性を与える。したがって、「女らしさ」の表象はシャーロットが作家であった事実を覆い隠したり、否定するためではなく、「書くこと」を正当化し、女性作家に名誉を与えようとするためのレトリックなのである。同時にそれは伝記の主人公に同一化するギaskell自身の文学的野心の正当化を意味しており、ギaskellが作家として生き残る行為と戦略とに強く結びついているのである。

注

本稿は第2回日本ヴィクトリア朝文化研究学会全国大会(2002年11月16日、於大手前大学)における口頭発表原稿に加筆・修正を施したものである。

¹ 虚構性については、Edgar Wright は大量の資料から選択し、ギaskellが描きかけたシャーロット像を構築したと指摘し (Wright 152–53)、Jenny Uglow は『生涯』のなかにギaskellの作品のパターンに多く見られる苦悩する娘、放蕩息子、

厳格な父親の物語との相似を見出している (Uglove 399)。また、自伝的な要素について、Margaret Homans はギヤスケルがシャーロットに自己を投影、同一化していると論じ (Homans 173)、Gabriel Helms はシャーロットに感情移入する語りが自分自身を語ってしまうのだと分析している (Helms 345)。

² *Jane Eyre* (1847) に女らしさや上品さが欠けていると指摘した代表的書評は、1848年12月号の *Quarterly Review* に掲載された Elizabeth Rigby の “*Vanity Fair, Jane Eyre and Governesses’ Benevolonet Institution*” である。また、コンダクト・ブックの著者 Sarah Stickney Ellis も『ジェイン・エア』と *Shirley* (1849) の両作品を “so remarkable for glaring violation of good taste” (*Morning Call* 35) と評している。

³ 他には1855年4月14日号の *Literary Gazette* がシャーロットと Arthur B. Nicholls の結婚に対する父の反対や、事実を反したブラッドフォードの教区牧師の仲介などをゴシップ的に描いた。

⁴ シャーロットはこの論文が女性によって書かれたものだと直感したが、発表直後は一般に John Stuart Mill が著者だと考えられていた。1859年にミルはこのシャーロットの批判を目にし、“The writer is a woman, and the most warm-hearted woman, of the largest and most genial sympathies, and the most forgetful of self in her generous zeal to do honour to others, whom I have ever known.” と Harriet Taylor を弁護する手紙をギヤスケルに送る。テイラーの「女らしさ」を称えたこの文面は『生涯』の第3版の改訂の際に註として付記された (390)。

⁵ この後もシャーロットが妹たちと、あるいは一人で部屋を歩き回るエピソードは2度繰り返される (247, 440)。

⁶ 実際に同一の手紙において彼女は、“... I never did write a biography, and I don’t exactly know how to set about it; you see I have to be accurate and keep to facts; a most difficult thing for a writer of fiction.” (*Further Letters* 155) と思うように書けない不安と焦燥感を吐露している。ギヤスケルの障害は家庭的な義務による中断や伝記執筆の難しさだけではなく、実質的にシャーロットの手紙の所有権を持ち (*Letters* 421)、エレンに『生涯』の原稿を見せることを禁じた (*Letters* 425) ニコルズ存在も障害であった。一方で、当初から伝記の出版に消極的であったニコルズは1856年12月1日にジョージ・スミスに宛てて、ギヤスケルへの不快感を露にしいる (quoted in Uglove 403)。

⁷ 『生涯』の執筆に取り組んでいた間も、“An Accursed Race” (1855.8)、“Half a Life-Time Ago” (1855.10)、“The Poor Clare” (1856.12) とそれぞれテーマの異なる短篇を *Household Words* に発表し、ギヤスケルの創作活動は旺盛であった。

引用文献

- Bick, Suzann. “Clouding the ‘Severe Truth’: Elizabeth Gaskell’s Strategy in *The Life of Charlotte Brontë*.” *Essays in Arts and Sciences* 11 (1982): 33–47.
Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs Gaskell’s*

- Demon*. Charlottesville: UP of Virginia, 1992.
- “British Family Histories.” *Quarterly Review* 98 (1856): 289–321.
- Chapple, John A.V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Mandolin, 1997.
- Chapple, John and Alan Shelston, eds. *The Further Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 2000.
- [Dallas, Eneas Sweetland.] “Currer Bell.” *Blackwood’s Edinburgh Magazine* 82 (1857): 77–94.
- “A Few Words about ‘Jane Eyre’” *Sharpe’s London Magazine* NS 6 (June, 1855): 339–42.
- Ellis, Sarah Stickney. “Review of *Shirley*.” Vol. I of *The Morning Call, A Table Book of Literature and Art*. London, 1850.
- . *Yong Ladies’ Reader*. London: Grant and Griffith, 1845.
- Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Heilbrun, Carolyn. *Writing a Woman’s Life*. New York: W. W. Norton, 1988.
- Helms, Gabriel. “The Coincidence of Biography and Autobiography: Elizabeth Gaskell’s *The Life of Charlotte Brontë*.” *Biography* 18 (1995): 339–59.
- Homans, Margaret. *Bearing the Word: Language and Female Experience in Nineteenth-Century Women’s Writing*. Chicago: Chicago UP, 1986.
- Marcus, Laura. *Auto/biographical Discourses*. Manchester: Manchester UP, 1994.
- Rigby, Elizabeth. “*Vanity Fair, Jane Eyre* and Governesses’ Benevolent Institution.” *Quarterly Review* 84 (1848): 153–85.
- Smiles, Samuel. *Character*. London: John Murray, 1871.
- Smith, Margaret, ed. *The Letters of Charlotte Brontë*. 2 vols. Oxford: Oxford UP, 1995–2000.
- [Stephen, James Fitzjames.] “The License of Modern Novelists.” *Edinburgh Review* 106 (1857): 124–56.
- “Topics of the Week.” *Literary Gazette* 14 Apr. 1855, 235.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.
- Wright, Edgar. *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment*. London: Oxford UP, 1965.

refinement or mass-production of standard quality?

The Great Exhibition of 1851 was an epitome of commodity world of mid-nineteenth century Britain, which also reflected diverse, sometimes contradicting interests then held.

The Rhetoric of “Femininity”: Elizabeth Gaskell’s *The Life of Charlotte Brontë*

Chieko ICHIKAWA

Elizabeth Gaskell’s *The Life of Charlotte Brontë* possesses fictional and autobiographical elements. By describing Charlotte as an exemplary woman of the Victorian period, Gaskell aims at justifying Charlotte’s writing. Furthermore, Gaskell, a woman writer too, projects herself into her biography’s heroine and seeks to justify her own literary ambitions.

Reconstructing episodes displaying Mr. Brontë’s eccentric deeds, Branwell’s moral corruption and women as victims of patriarchy, Gaskell weaves her tragic life of Charlotte. Moreover, through the strategic use of quotations from Charlotte’s own words in which her femininity is shown, Gaskell denies that heroines’ claims for women’s rights in Charlotte’s novels written under the pseudonym of Currer Bell are in fact Charlotte’s. In this way, a contrast is shown between the Charlotte who cannot be emancipated from moral standards applied to women in her private life and the Charlotte who raises the woman’s issues through her works.

Gaskell’s purpose is to show that it is both her obligations as a woman and as a writer which give significance to Charlotte’s life. She further claims that Charlotte suffers mental deprivation when the harmony between her two obligations is lost due to her losing the opportunity to write. Representation of Charlotte’s “femininity” does not veil the fact that Charlotte was an author, but justifies it. Thus, “femininity” should be considered as rhetoric for honouring the female authorship. At the same time, it means that Gaskell, who projects herself into her heroine’s suffering, is also trying to justify her own literary ambitions. There-

fore, this rhetoric of “femininity” must also be associated with Gaskell’s strategies to survive as a woman writer.

The Rise and Fall of Literature in Victorian Manchester

Ayaka KOMIYA

During the Victorian period, Manchester, Cottonopolis, became England’s and therefore the world’s largest industrial city. No doubt it was the bustling centre of business, but where did it stand in the world of literature? Manchester’s contribution to Victorian literature remains underrated. In fact, it was, at least for a time, the city that led Victorian literature. It was there that social novels were born; it was there that the era of ‘new journalism’ started. This paper presents a picture of how the Mancunian spirit helped literature to flourish, and then how its abatement resulted in the eventual decline of the city’s production of literature.

Respectable and Single: The Wet Nurse Discourse in Victorian England

Motoko NAKADA

This essay examines how the wet-nursing practice evoked controversy in Victorian England at a time when the ideology of breast-feeding was prevalent among the middle-class. Though in slow decline, various discourses show that wet-nursing was still rather common in England. Some regarded a wet nurse as a troublesome servant, while others feared her as a source of moral and physical pollution. And the subject of wet nurses, especially those who were unmarried, excited controversy in medical journals where they were often criticized as immoral. In spite of this, classified ads show that wet nurses were sought